退職記念随筆

至誠一貫

吉　田　信　介

感謝をこめて

2006年より関西大学に奉職させていただき、外国語学部の創生期に立ち会わせていただいたことは、私の大学教員生活35年において最も充実した時期でした。関西大学外国語学部ここにありとその学術的、教育的、社会的発信力は、国内のみならず海外にも響き渡り、関西の有力大学が我も我もと類似学部を設置したことは、記憶に新しいところです。

竹内 理学部長の秀逸なリーダーシップのもと、国際的に名声を得られた先生方をはじめ、職員の皆様の強力な支えがあり、優秀な学生諸君に恵まれたからこそ、私の外国語学部での多岐にわたる教育研究活動ならびに社会的活動が可能となりました。この場を借りて心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

そもそも父（昭22法）と叔父（昭26経）が共に関西大学（岩崎学長）出身で、私のDNAには関大情報が組み込まれており、その校風に深く親近感を覚えたことは当然のことでありました。特に、それまでに勤めた大学と違い、就任式で初めて大学執行部の先生方に「歓迎の拍手」をされ、人情の町なにわに生まれた大学の温もりを肌で感じることができた唯一の大学でした。

これからも「学の実化」がいう学理と社会との調和をめざし、不易流行を見極め、常に挑戦し続ける関西大学がますます発展することを願ってやみません。

それでは、私が歩んできました「英語修行」と「国際貢献活動」ならびに、最も力を入れてまいりました「ゼミ活動」について紹介させていただき、関係者の皆様方への何らかのご参考になればありがたく存じます。

英語修行と国際貢献活動

幼少期

私と英語の最初の出会いは家の中でした。祖母（明治45年生）が大阪鶴橋天王寺村のミッションスクール「普溜（プール）女学校」出身で、時々英語やフランス語の単語を並べたり、ミッショナリーの先生の髪をさして「イエローヘヤー」と言ったところ、“golden hair”と言いなさいと指導されたりしたことを懐かしそうに話していました。月月火水木金金を歌っていた戦

中派の父からは、「木剣腰に差ぁすでぃ（Thursday）」を教わりました。

幼稚園に入ると、阪急十三の聖公会系の「博愛社」で、牧師さんにピクチャーカードで英単語を教えていただき、クリスマスには聖堂に大きなクリスマスツリーが飾ってあったのを思い出します。小学生のときには、時々ハワイから親戚の日系人の叔母が訪れ、片言の日本語と流ちょうな英語を話していました。その時ハワイのパイナップルとアイスクリームをいただき、この世にこのような美味しい食べ物があるのかと感動しました。それが生のアメリカに触れた最初でした。

中学校

1964 年、中学校に入りますと、アメリカ構造主義言語学に基づくオーラル・アプローチとパターン・プラクティスを実践する英語教科書 “A New Approach to English”（大修館書店、1962）によって英語と出会いました。当時、学芸大附属池田中学校には学芸大出身の由良先生がおられ、ヒルマンを運転し、指をなめながら「あんなめりかんボーイ」と発音指導され、東田先生は、ご自分の頭髪のない頭をさされて、「ハエトマルトスベール」と発音すると英語に聞こえるでしょうと、英語のリズムを指導されておられたのを今でも鮮明に覚えています。

当時の附中はほとんどの生徒が塾や家庭教師に教わっており、私も豊中の「岩野英語塾」に入門し、三中や五中の生徒とともに、直枝塾長のもとで、モーム翻訳で知られる龍口直太郎先生の「英文解釈読本基礎編」（開隆堂出版）とひたすら格闘していました。その時 “Tomorrow is another day.” を私がたまたま閃いて「明日は明日の風が吹く」と訳すと、先生に天才といわれて握手していただいたことが印象に残っています。

岩野英語塾

岩野直枝先生は、北陸出身の昭和一桁生まれの戦中派で、戦後苦労されながら “Where there is a will, there is a way.” をモットーに「辞書と山貞の文法書」をバイブルとして猛勉され、大阪外国語大学英語学科の初めての女子学生となられ、その経験をいかして岩野塾を開かれました。そこでは “thinking in English” と同時に、“thinking through English” ができるように教育されました、つまりひとつの言葉には色々な意味があって、どの意味がこの場合適切か、またどのように使えるのか、といった言葉の役割は、辞書を引くことによってのみ理解出来るようになること、そして辞書を引くのを苦にしない子に育てておくことが、高学年になればどれ程大切なことかを知ることになり、さらに辞書で、動詞には自動詞と他動詞があることや、文脈の中からその語の品詞を知らないことには、辞書すら満足に引けないことを悟るようになる、との言葉を残しておられます。そして、先生の教え方の基本は、次の 4 つに尽きるともおっしゃってました。つまり、（1）会話を導入して、素直にリズムで覚えさせる、（2）既習の知識を足場にして、次の段階を組みたてる、（3）先生と生徒との問答によって、生徒自身が文の構造

を自然に身につけるよう指導する、（4）日常生活の中からたくさんの文例を用意し、生徒自身でひとつの規則（文法）を発見する、です。しかしながらここから巣立って無事ハーバードに入学した教え子から、講義が理解できないとの告白にショックをうけられ、「順読順解」という方法を産み出されました。その方法は、（1）英文をグループ毎に音読し、内容を把握、（2）原文→日本文→原文と訓練する、そして、英文は名詞が主人公であるのに対して、日本文は動詞が主語であるため、（3）句（名詞構文）を節（動詞構文）にする訓練を行うことを提唱されました。今から思えばこのようなカリスマ教師から教えを受けられた自分は誠に幸運であったと言えます。

高等学校

1967 年、附属高校池田校舎に進み、そこで先進的な英語の授業を受けました。指定辞書は、H. E. Palmer の弟子 A. S. Hornby の *The Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（ISED：『新英英大辞典』、開拓社）でした、これは、日本人対象で高校 1 年生でも理解できる 1000 語レベルで編纂されており、動詞型 25 文型の表示、［C］［U］の区別の明記、豊富な慣用句が掲載された名著でした。前年に京都大学を出られた先生が retold 版の *David Copperfield* をはじめとする多読教材を導入され、毎時間自己ペースで黙読しました。今では普通に実施されている多読をこの時代から取り入れられ、貴重な体験ができました。その先生の専門はシェイクスピアで、よく授業中に LP レコードでハムレットの独白をかけられました。全く何を言ってるか分かりませんでしたが、シェイクスピア劇の迫力に圧倒されました。この先生が指導されていた ESS 部員が、附高祭で本格的な衣装を着けてヴェニスの商人を演じ、シドニーからの帰国生の British English による悪役シャイロックの迫真の演技が印象に残っています。阪大からは五島忠久教授が英語について講演され、「古池や蛙飛び込む水の音」を、“Old hair, frog to become sound of water.” と訳して笑いを取られたことを覚えています。

しかしながらその頃学生運動が盛んになり、附高もその影響を受け、先輩の大学生が一部の生徒を扇動して校舎を封鎖し、最終的には機動隊が導入されたことはショックでした。当時ベトナム戦争の最中にあり、「何でも見てやろう」の小田実のべ平連、三島由紀夫の文化防衛論と日の丸を振っていた右翼の生徒、民青、そして全共闘シンパを含めた全校集会が行われ、高校生なりに天下国家について真剣に議論した時代でした。

1969 年、大学紛争のあおりを受けて、前代未聞の東大入試中止が決まり、翌 1970 年には、前年度の京大への不本意入学者が東大を受け直し、附高のトップ層は大きなダメージを受け、さらにその影響は多くの大学に波及し、受験混乱時代を体験しました。その頃の受験単語のベストセラーは『赤尾の豆単』でしたが、附高では語彙レベル別『活用本位ステップ英単語集』（佐藤補吉、山海堂、1968 年）を使いました。授業では、近畿大学講師でもあった杉本先生による *The Devil's Dictionary* で有名な Bierce の “A Horseman in the Sky” などの文学作品を精読し、

参考書は美誠社の文法書や原仙作の『英文標準問題精講』（旺文社）を使いました。同年 7 月には、アポロ 11 号の月面着陸で、アームストロング船長の “That’s one small step for［a］man, one giant leap for mankind.” が衛星中継され、ひどい雑音にもかかわらず西山千が明晰な通訳をされ、おおいに感銘を受けました。

大学

1971 年、立命館大学法学部に進学しました。そこでは宮地教授に、*The Summing Up* をはじめとするモームの作品を学び、皮肉な名言として（イギリス関係の方には申し訳ございません）“To eat well in England you should have breakfast three times a day.” があったのを記憶しています。同じころ、前年の大阪万博で英会話ブームが起こり、私も三条通柳馬場の京都 YMCA に通いました。そこではオハイオ州立大出身の Gary 先生の授業の後、クラスメートとともに近くのイノダコーヒーで世間話をしたことが大変勉強になりました。「セサミストリート」、「NHK テレビ英語会話初級」（田崎清忠）、「NHK テレビ英語会話中級」（國弘正雄）、FEN（Far East Network：米軍極東放送網）にでてきた語彙、表現、スラング、文化、音楽、ジョークについて、私 Clark（英語名）なりに解釈して、先生や仲間のコメントをいただくことで、英語で議論する喜びに目覚めました。例えばセサミストリートで古色蒼然とした探偵の間投詞を発音して意味を尋ねたところ、それは “egad” で今では使わないことや、小泉八雲の『怪談』をご存知なかったので、雪女を英語で解説したりしました。

西ドイツマンハイム市

1972 年、（財）世界青年交流協会主催の「日本・ドイツ青少年定期交歓 Deutsch-Japanischer Jugendaustausch」の団員として、全国各地の大学生とともに、西ドイツ南西部のバーデン＝ヴュルテンベルク州マンハイム市を表敬訪問しました。往路はアンカレッジ経由、北極点通過（色紙が配布されました）でフランクフルトに入りました。現地では大学生の英語でのエスコートのもと、公人接見、市庁、証券取引所、BASF、ポルシェのテストコース、州議会、欧州議会、マックスプランク研究所、プファルツのワイン女王との接見、東ベルリンの訪問を行い、単なる観光ではできないドイツの文明・文化に深く触れることができました。日独文化交流会では、我々の英語による解説のもとで、七夕・柔道・茶道・日舞・落語の紹介をしました。特に落語の笑いの伝え方には苦労しました。訪問中最も印象に残っているのは、西ベルリンの地下鉄で東ベルリン側の駅にさしかかった時、突然薄暗くなり、広告やポスターのない殺風景な光景が目に入り、地上に出てベルリンの壁をこの目で確認したことでした。まさに東西冷戦の歴史の証人として語り継いでいくべき貴重な体験でした。帰国後、毎年ドイツからの訪問団を受け入れて日本文化を英語で紹介し、国際交流はもとより日本を再発見することができました。地元で訪れたことがなかった大阪城や、外国人同伴で手続きが簡易な桂離宮見学など、改めて

日本文化の奥深さと、英語はもとより日本語でも説明することの難しさに直面しました。特に、わびを “beauty coming from simplicity”、さびを “beauty that comes with age” と説明することや、広隆寺の半跏思惟像では。ロダンの The Thinker を引き合いに “deep thought and contemplation” の最中と説明すれば、なんとか納得いただけることを学び、これらの交流体験が現在の国際理解教育に活かされています。

カンザス州ローレンス市

1976 年、米国中西部のカンザス大学大学院教育学研究科に入学しました。専攻は Curriculum & Instruction で、州内の現役教師や、アジアや南米からの留学生とともに最新の教授法を学びました。授業では、留学生の出身国事情を考慮した多様な文化や風習を取り入れた教材作成や、教授法が展開され、Lingua Franca としての英語を意識した瞬間でした。

カンザス州といえば「世界のパンかご」と呼ばれる大農法による小麦や、オズの魔法使い、大平原の小さな家、OK 牧場の決闘が有名ですが、バプティストが多く、住民の 8 割をしめる白人のうち、ドイツ系が 3 割をしめ、勤勉さを美徳とする土地柄でした。留学中は毎日が国際交流でした。マッカラム寮では、必ず地元生と留学生がルームメートになり、ロビーで流れている CBS ニュース、“60 Minutes”、“Saturday Night Live”、“Jeopardy!”、“Happy Days” を観ながら、聞き取れないときは地元生に助けてもらいました。カフェテリアでは、毎日初対面の相手とテーブルに着き、英語で雑談しながらの食事は慣れるまで食べた気がしませんでした。そこでの出会いがきっかけとなり、気の合った仲間と一軒家を借りてハウスシェアリングによる国際共同生活に発展するケースが多くみられ、私の場合は、マレーシア系中国人 3 人と地元カンザス出身の 2 人とで共同生活をしました。料理・買出し・掃除を交代で行い、週末にはオープンハウス・パーティーで新しい友人の輪を広げていきました。流暢な British English を使うマレーシアの留学生は、日本の学生とは違い、母国における中華系排斥からのがれるため、米国永住に向けて必死で学位取得を目指していたのが印象的でした。

カンザス大学はバスケットボール発祥の地で、1891 年に Naismith 教授が極寒の地における室内競技として考案し、当初は「桃の籠」にサッカーボールを投げ入れていたそうです。現在までに 79 名の NBA 選手を送り出し、3 回の全米優勝を果たし、そのたびに町をあげて祝いました。アメリカンフットボールを含めた大学のラジオ局によるスポーツの実況中継は英語学習には最適の教材で、選手名、プレー、形勢、勝敗を瞬時に聞き取らないとついて行けず、速聴の練習になりました。

1976 年は、ベトナム戦争のサイゴン陥落（1975 年）直後で、カンサス大学も公立であったため南ベトナムからの亡命者（エリート層）を受け入れ、寮の一角が彼らの居住スペースになっていました。そこにいた元弁護士と親しくなり、彼が夜遅くまで分厚い calculus（微積分）のテキストと格闘していた光景には心苦しさを感じました。まさにベトナム戦争という負の遺産

を体感した瞬間でした。

教養学部には東アジア言語文化学科があり、言語学では A. Yamamoto 先生が先住民族 Algonquian 族の言語研究をされ、SA 立ち上げでお世話になった A. Tsubaki 先生は、歌舞伎・能・狂言の教育研究で日本政府から瑞宝章を授与され、自らも合気道の達人で市内の道場で弟子の指導にあたられていました。私自身も東アジア図書館で、日系人司書の Eugene 氏のもとで日本から取り寄せた国華などの専門図書の分類と配架に携わっていました。近郊のカンザスシティは倉敷市と姉妹都市関係にあり、領事館や日米協会を中心とした日本人会も活発に活動しており、毎年日米協会主催の「カンザスシティ Japan フェス」に参加して地元住民との交流を深めました。最近でもこの行事には SA 中の外国語学部生もアシスタントとして参加していました。

日本語学科のホームページには、日本語習得によるメリットとして“Studying Japanese possesses its own INTRINSIC REWARDS: learning one of the WORLD'S MOST COMPLEX LANGUAGES exercises the mind in unique ways. Japanese language students are NEVER BORED!”と述べられています。また、日本 SA プログラムも実施され、教育的効果として次のように述べられており、本学部の SA 精神とも通じるところがあります：Study abroad is a ONCE-IN-A-LIFETIME OPPORTUNITY with benefits which go far beyond academic learning. Students develop skills in INTERCULTURAL COMMUNICATION AND PROBLEM-SOLVING applicable to EVERYDAY LIFE. Students learn to become INDEPENDENT and take INITIATIVE, and they gain SELF-CONFIDENCE, FLEXIBILITY, PERSEVERANCE, and APPRECIATION OF DIVERSITY. An international experience strengthens CAREER OPPORTUNITIES and increases AWARENESS OF THE INTERCONNECTED NATURE OF THE WORLD. The global character of the economy has prompted more students to experience CROSS-CULTURAL LINKAGES FIRST-HAND（以上、文中の大文字部分は筆者による）. このように、アメリカ大陸の中央に位置しながら、日本研究が盛んに行われており、その理由の一つに勤勉さを美徳とするドイツ系住民が多いことが、日本人と気質が合うことがあげられると思われます。

研究活動で必須の統計処理は、当時は大型コンピュータによる SPSS で行い、Fortran のコードを自動販売機で購入したパンチカードに打ち込んでバッチ処理をしていました。カードは順番に並べないとコンピュータが処理してくれませんので、床に落とすと大変なことになりました。その後、修了するころには、タイムシェアリング（TSS）を利用して処理をおこなえるようになり、IT の進歩を体感することができました。

学期間の休暇中は、寮が閉まるため、カンザス州最大の都市ウィチタや、ミズーリ州のカンザスシティで、大学主催による留学生向けのホームステイがありました。ボーイングの組立工場があるウィチタでのサンクスギビング・ホームステイでは、毎日違うバプティスト教会をホストと伴に訪問し、Potluck Luncheon（持ち寄り昼食会での食事）をいただきながら、大勢の

地元民の前で堂々と英語でスピーチをする度胸がつきましたが、同時に自分が日本を代表して発言していることの重みも感じました。と申しますのも、中西部では日本関係の報道がほぼないため、「日本は中国のどのあたりにあるの」とか、「日本に SONY はあるのか」などの質問責めにあい、インターネットのない時代に、その場で正確に対応することが求められ、日本について改めて勉強するいい機会でした。このように留学生として現地に住むことによる多様な体験には、計り知れないポテンシャリティーがありますので、今後とも外国語学部における SA プログラムに期待するところ大なるものがあります。

ロサンゼルス市：日系企業

1981 年、大学院修了後、文具関係の日本企業のロサンゼルス支社に勤務しました。そこでは台湾の台中市で製造した binder clip（紙クリップ）を日本の本社を経由してアメリカへ輸入し、政府への入札・仕入れ・納入・在庫管理・文具フェアでのプレゼンを行いました。ここでの英語を駆使した業務により、日本からの駐在員の右腕となって日米の架け橋になれていることを実感できました。場所はロスアンゼルスのサウスベイ地区にあるガーデナという北米一日本人の割合が多いコミュニティで、白人はもとより、アファーマティブ・アクションにより、日系人（日本人以上に日本的）、フィリピン系、メキシコ系、キューバ系の方々と共に働きました。lingua franca としての多様な訛りの英語を学ぶ絶好の機会でした。時には口論になることもあり、いかに雄弁に相手を説得するかをめぐって、諺、比喩、映画に出てくる気の利いた表現、たとえ話などについて猛勉強しました。

パプアニューギニア独立国

2002 年から 2008 年にかけて、国際貢献活動として、JICA 技術協力プロジェクト（業務実施契約）による教育プロジェクト「テレビ番組による授業改善計画プロジェクト」に専門家（テレビ授業モニタリング・評価）として参加しました。

パプアニューギニアは、世界で最も言語の豊富な国といわれ、険しい山岳地帯、湿地帯に阻まれてワントークと呼ばれる部族間の交渉が少なかったこともあり、小さなコミュニティが独自の文化・言語を発達させ、人口が 600 万人に対して、言語の数は 800 以上に及びます。公用語は英語ですが、現地の人々の間では、lingua franca であるピジン語（Tok Pisin）、ならびに vernacular language である土着語が話されています。先の大戦では、「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れぬニューギニア」と評され、当時の報道によりますと、「千古斧鉞を知らざる樹海が広がり、悪疫瘴癘の蛮地」と称せられた激戦地で、水木しげるの『総員玉砕せよ!』や山本五十六終焉の地で知られ、今でもお盆になると第 18 軍の関係者による慰霊祭が各地で行われています。戦後生まれの「戦争を知らない子供たち」世代にとって、世界大戦を肌で感じとることができる貴重な経験ができました。

本プロジェクトの現地カウンターパートナーは、教育省、国立教育メディアセンター、東セピック州・ブーゲンビル州教育局の関係者 22 名で、日本側からは、教育計画、番組制作、理科・算数教育・モニタリング・教授法・遠隔教育・学校運営ほか専門家 13 名が参加しました。そこでは、首都のモデル校におけるモデル授業をテレビ番組として全国にライブ配信し、それを各地の学校で受信して、全く同じ授業を行うものでした。

本プロジェクトのスーパーゴールは、「協力対象校においてテレビを活用した遠隔教育の適切な実践・継続により、授業の質が改善する」であり、最終的には、1）質の高いモデル授業が継続的に配信されたこと、2）テレビ受信校のテレビ活用教師の授業方法が改善されたこと、3）テレビ受信校においてモデル授業番組を継続的に受信するための環境が整備されたこと、4）テレビ授業を活用した遠隔教育が全国の小学校に普及する可能性が検証されたこと、5）地元コミュニティとの関係改善による学校運営への支援強化など教育的、社会的効果が確認されたこと、から、本プロジェクトの成果はほぼ計画通りの達成できたとの評価を PNG 教育省及び対象州から受けました。

私は、モニタリング及び評価（モデル授業番組と教員研修番組モニタリング評価）を担当しました。主要活動は中間モニタリングの実施指導で、遠隔校（ブーゲンビル自治州と東セピック州）における TV 授業の実施効果とフィードバックを行うため、1）モニタリング指標の提案・選定・指導、2）遠隔校での効果的なモニタリング指導と現場教員へのフィードバック、3）遠隔地でのワークショップの実施と授業改善への提案、をそれぞれ実施しました。

その結果、それまでパプアニューギニアでは、中学卒業後すぐに教師として採用されることが多く、授業運営に自信がない教師が多くみられましたが、モデル教師と生徒によるテレビ授業を受けることで、教育力が向上し、生徒の学習意欲も高まったことを現場で目撃できたことは、教育者としての大きな収穫でした。特に、遠隔地の生徒が、テレビでモデル授業を受けている首都の生徒の様子を見て、ライバル意識が芽生え、学習への動機づけがなされたこと、その結果、算数と理科の学力が向上し、本プロジェクトの目的が達成できたことが明らかになりました。さらに、このプロジェクトがきっかけとなって、村おこしを始める地域や、コミュニティの結束が高まった地域が出てきたことも、開発途上国ならではの副産物として収穫できたことのひとつでした。

重要な点は、遠隔学習を通じて、教育を受けなければ農業以外への就職が難しく、教育を受けてコンピュータを使えれば、外国の企業で働けるという夢を持てることを、生徒たちが自覚し始めたことでした。いわゆる「援助漬け」という外発的動機づけではなく、純粋に学習して条件の良い仕事につきたいという内発的動機付けを目撃し、ニューギニアの将来を担う人材育成に貢献できたという実感がもてました。

大学教員

1982 年、契約期間を終え帰国。大学で非常勤講師を開始しました。その時役に立ったのが留学の時の経験です。当時、1 ドル 360 円から変動相場制に変わったといえ、250 円の時代で、インターネットもなく、留学経験者も少なく、最新の現地事情を交えての英語の授業に、学生たちは興味津々でした。帰国後の英語力については、ネイティブスピーカーの先生方のパーティーへの参加や、JALT での発表などにより維持する努力を行いました。

1986 年、プール学院に奉職して、学生たちと年齢が近く、ミッションスクールの外国語教育への意識の高さと、教員の使命感の強さに囲まれて英語教育に励むことができました。夏期には、イギリス Essex の Dunmow での 1 か月の滞在プログラムに同行し、そこでは、地元出身の教員の Parish（教区）をあげての学生受け入れであったため、通常の留学では得られない貴重な体験ができました。Suffolk の Newmarket では、広大な牧草地でのびのびと暮らしている絵に描いたようなサラブレッドの親子との対面、不思議の国のアリスの A Mad Tea-Party を連想させる貴族の館の中庭での high tea、チューダー朝から続く短いバットをもって走塁する野球の原型 rounders の体験、そして、カントリー音楽をバックに、caller がランダムに指示する様々な calls に従って、即座にパートナーとダンスを変化させることで、頭脳と身体の俊敏性が求められる square dance など、英語という言語の発生地であるアングロ・サクソン文化の深いところに入ることができました。

これらの経験に基づき、武庫川女子大学では、ワシントン州スポケーン市のフォートライト分校での国際交流授業と業務、摂南大学では、寝屋川市とトロント近郊のオークビル市の大学との交流協定の締結と学生の派遣、立命館大学では、立命館アジア太平洋大学の留学生とのオンライン交流授業をそれぞれ行いました。

関西大学　～ゼミ生とともに歩んだ 10 年～

関西大学の学是は、学理と実際との調和を説いた「学の実化」にあります。これを受けて吉田ゼミでは、英語教育学を学理とし、その実際である国際理解教育・国際支援活動・社会連携による人材育成に取り組んでまいりました。そこでは常にグローバル・リーダーという言葉を意識しており、多種多様なものが選択できて、便利で自由度が広がった現代社会でのゼミ生像は、様々なものを認めつつ、それに自らを合わせながら、なおかつ自分を失わない人材であるといえます。そのためには、1）幅広い教養（知識）、2）問題解決能力＋言語運用能力（技能）、3）自覚と責任（態度）をそなえる必要があり、これらは「相手との対話」によって養成できると考えています。

このアクティブラーニング型学習理論の基盤は、デューイの学習論から出てくる問題解決学習にさかのぼり、正解のない問題、または正解が複数ある問題への対応力養成につながってい

ます。つまり今時の福島原発のシビア・アクシデント、COVID-19 感染症によるパンデミック、南海トラフ巨大地震などの人知を越えた巨大自然災害や、リーマンショックによる世界的経済金融危機をはじめとして、SDGs 目標から除外された宇宙ゴミ問題、核の平和利用、地雷除去、LGBTQ、宗教、人口問題、ならびに、精神的豊かさの項目としての文化的多様性（スポーツ・美・芸術・歌や踊り・エンターテインメント・笑いなど）について、将来建設的解決ができるレジリエンスを備えた人材育成が可能となってまいります。

このような教育目標のもとで「学の実化」にむけたゼミを運営してまいりましたが、ここでは、1 ～ 10 期にわたって実践してきたゼミ活動を紹介することで、外国語学部におけるゼミの一つの形態としてご参考にしていただけば幸いです。

ゼミの活動方針

吉田ゼミは、「国際社会でともに生きぬく力」ならびに「持続可能な開発（Sustainable Development）」を標榜し、そのモットーは、“Tell me and I forget. Teach me and I remember. Involve me and I learn.”（B. Franklin）です。シラバスに記した授業内容は、「真のグローバル人材は、リージョナル・ローカル・グローバルを総合して物事を考えられ、日本にいても世界のことを仕切ることができる力を持っています。そのために、SA で培った国際コミュニケーション力、英語プレゼンテーション力に加えて、国際パートナーシップ、国際協働、国際コンフリクトにおける問題解決力・交渉力・プレゼン力を高め、国際社会でともに生きぬく力を追求していきます。また、直面する様々な課題を解決し、世界中の人々や将来の世代、みんなが安心して暮らすことのできる社会をつくるため、社会的公正の実現や自然環境との共生を重視した新しい開発のあり方である SDGs を追求します」としています。その到達目標は次の 2 つです。「（1）国際交流イベント（日本：WYM = World Youth Meeting;　台湾：ASEP = Asian Student Exchange Program）では、PBL の一環であるアジアの学生による国際交流イベントに参加して、国際協働チームによるリンガフランカとしての英語プレゼンテーション（3P 分析、内容構成、デリバリー、ビジュアル化、メディアの活用、リハーサル）を行います。そのことで、国境を越えた協働問題解決活動を通して、言語的問題（論理レトリック・発音等の違い）、文化的問題（社会構造・習慣等の違い）を克服し、多様性を認め合う国際パートナーシップを育成します。その結果、国際社会（特にアジア）で活躍できる人材育成を目指します。（2）国際協働プロジェクトでは、NGO を含む市民レベルでの国際協力活動の目覚ましい広がりを理解し、国民参加型の援助を目指します。その過程で理論的基盤とコミュニケーションの手段としてのことばの訓練、および説得力と交渉力を習得します。その際、Sustainable Development を背景に、Global Issues（地球温暖化・人口・食糧・貧困・ジェンダー）について情報収集を行い、その問題解決法を異文化理解、学際研究、多国家間関係の視点から考えます。それらを Study Tour で実践・リフレクションを行うことでグローバルマインドを習得します。」

次にこれらに基づき、吉田ゼミが実践してきた活動とその成果を示します。

活動記録

【受賞・支援金プロジェクト】

◎「関西大学学長奨励賞」

○数々の SDGs 啓発活動により評価されました（吉田ゼミ）（2021/3/15）

○アクションプランコンテスト受賞が評価されました（宇津見）（2022/3/14）

◎「関西大×法政大 SDGs アクションプランコンテスト～持続可能な未来のために私たちができること」

○最優秀賞「ジェンダーかるたで楽しく学ぼう」（宇津見）（2021/12/4）

○優秀賞「途上国におけるオンライン識字教育支援活動」（山本、小路）（2020/11/9）

◎「関西大学× SDGs ～持続可能な開発目標のために関大としてできること～」

○ Best SDGs 企画賞「ブルーシーフードを知ろう！」（白嶋、谷口）（2019/12/6）

◎関西大学「ゆめサポ　―夢実現支援金」の獲得

○「ガーナにおけるスマホで絵文字・オンライン英語識字教育プラン」（新原）（2021/7/28）

○「日本の伝統工芸を活かしたリジェネレーションの活性化」（吉添）（2021/7/28）

12 のプロジェクト

①「堺市と関西大学との地域連携事業採択プロジェクト」助成事業

○「日中姉妹都市交流による大学生グローバル・リーダーの育成」（2020/4/1 ～ 2022/3/31）

１）中華人民共和国江蘇省連雲港市：連雲港高等師範専科学校（2020 年度）

２）中華人民共和国江蘇省連雲港市：連雲港職業技術学院（2021 年度）

ZOOM によるオンライン交流を実施しています。内容は伝承・食文化交流で、日中相互理解のために２つの企画を実践しています。（1）日中昔話イベント：両国の昔話や言い伝えを英語による紙芝居で発表することで、それぞれの文化や思想を相互理解し、（2）日中食文化交流：世界的に有名な日本・中華料理の正しい方法を紹介し合うことで、誤解されがちな調理法を改めます。そのことで、真の料理文化への理解と正しい継承を行っています。使用言語は、日本語、中国語、英語です。パートナー校では、日本語による入学試験も行っており、日本文化や日本語への関心が高いです。

また、関西大学東西研究所教員による日中文化交渉史の講演を行うことで、関大生と堺市民への日中文化啓発を行っています。内容は、二ノ宮 聡准教授による「中国の民衆生活にみられる神と鬼」、ならびに、内田慶市名誉教授による「右が左で左が右で～言葉の背景にあるもの」です。

② 国際学生協働プレゼンテーション大会：WYM（World Youth Meeting：日本）& ASEP（Asian Student Exchange Program：台湾）

毎年 2 回行われ、日本・台湾・カンボジア・韓国・中国・インド・ベトナム・タイ・マレーシア・フィリピンの大学・高校生による国際協働チーム（2 ヵ国ペア）が共通テーマ（Sustainable International Cooperation; What does well-being mean for our future? など）について、オンラインによる事前ディスカッションと、対面による本番の国際協働プレゼンテーション大会の実施・審査・表彰（文部科学大臣賞）ならびにホームステイによる文化交流を行う文部科学省・高雄市後援のイベントです。関西大学のパートナー校は、義守大学と輔英科技大学でした。そこでは、EFL によるプレゼンテーション力をはじめ、八代（2002）による（1）コンフリクト・マネイジメント、（2）異文化適応力、（3）共感力が必要とされ、競争・共同・妥協・逃避・融通を通じて国際交渉力が習得されます。この仕掛けは、英語を使わざるを得ない状況に学生を追い込む PBL アクティブラーニングの一つの形であるといえるでしょう。同様の企画として関西大学の COIL や早稲田大学の CCDL とも通じるところがあります。吉田ゼミは、毎年、プラティナ賞を受賞し、昨年度は審査員特別賞を獲得しました。

③ 2021 KANDAI × HOSEI SDGs WEEKs プログラム（2021/11/22 ～ 12/3）への出展

○ Table For Two プロジェクト（学食不二家商事とのコラボ企画）

日本発の社会貢献運動で、先進国の参加者と開発途上国の子どもたちが、時間と空間を越え食事を分かち合うことで、先進国の飽食と開発途上国の飢餓の同時解決を目指すものです。開発途上国と先進国双方の人々の健康を同時に改善することをミッションとしており、肥満や生活習慣病予防のためにカロリーを抑えたメニューを学生食堂や社員食堂、カフェなどで提供し、購入すると 1 食につき 20 円が TFT 事務局を通じて発展途上国に寄付されます。20 円というのは発展途上国の 1 食分の給食費です。SDGs の目標としては、1, 2, 3, 4, 10, 15, 17 があてはまります。本企画を関西大学第 2 学舎食堂で実施し、タコライス、麻婆丼、ガパオライス、豆腐チーズキーマカレーを販売し、250 食を完売し、途上国へ 250 食分寄付しました。

○化粧品・ぬいぐるみ BOX（アジアリサイクル貢献活動とのコラボ企画）

使用済みや不要な化粧品やぬいぐるみを回収して、「アジアリサイクル貢献活動」という団体を通じて、タイに寄付する活動を行っています。コロナ禍の中で、寄付する化粧品の安全性をチェックし、中身が残っている場合は使用期限に半年の猶予があることを原則としています。SDGs の目標としては、12 と 14 があてはまります。今回、ダンボール 3 箱分を回収し、アジアリサイクル貢献活動へ発送しました。

④ ガーナ共和国におけるオンライン英語リメディアル識字教育支援（ゆめサポ事業）

教育大国日本の「英語を得意とする外国語学部生」が、ノンフォーマル教育としての「オン

ライン英語リメディアル識字教育」を現地カウンターパートと協働運営することで、ガーナ北部の人間の生存、生活、尊厳を守り、自らのために行動する自由を保障する日本型「人間の安全保障」を実践し、SDGs ゴール 4.1「全ての子どもが小学校教育を修了することができる」ようになります。

コロナで帰国中の JICA 海外協力隊員、同 OV、現地カウンターパート教員による、小学生を対象としており、現在、British Council などが運営する教育サイトで、英語の学習ソフトを精査して、現地向けの教材作成を行っています。インド製 i-Pad を現地へ無償配布してグループ学習を行わせ、現地生の英語力の向上を目標としています。

その知見に基づき、「途上国へのオンライン識字教育支援モデル」を策定し、世界へ普及させることを目指しています。

⑤　オコタックでの社会貢献活動

外国にルーツを持つ子どもを対象に、日本語・母語教育を含めた包括的な教育支援をおこなうために設立された NPO 法人おおさかこども文化センター（オコタック）が主催で開催された「多文化に触れる絵本の広場」に参加しました。そこでは、中国語、韓国語、ポルトガル語、タイ語、英語でそれぞれの国の方が来て絵本の読み聞かせを行いました。その際、吉田ゼミでは、会場の設営、巡回、「ありがとうの木（世界 22 言語による感謝のことば）」の運営サポートを行いました。

⑥　国際協力イベント WOW の開催・運営

タイトルは、「国際協力フェスティバル ～繋げよう！あなたの WOW（輪）を明日の国際協力へ～」で、主旨は、国際協力団体の活動発信を通して、団体同士の交流や一般参加者を含めた全ての参加者の今後の活動に繋げるとなります。そこでは、国際的活動に取り組む団体（フェアトレード商品を取り扱う団体、国際協力で海外へ赴く団体、国内で国際協力のために活動する団体など）の 10 のブース出展を行い、講演も行いました。参加者は約 200 名で、一般人、学生、高校生でした。

⑦　フィリピン女性自立支援団体 DAWN への支援

DAWN（Development Action for Women Network）は 1996 年に設立された女性自立支援 NGO で、日本から帰国したフィリピン人女性や、日本人の父親に育児放棄されたジャパニーズ・フィリピノ・チルドレン（JFC）を支援しています。そこでは、ソーシャルサービス（カウンセリング、法律相談、一時的なシェルター）、自立生計支援プログラム（技術訓練、自立生計支援、ミクロ経済）、リサーチ＆広報活動（世論の喚起、出版、女性や子供たちのための劇団）、教育（セミナー、ワークショップ、会議）、ネットワーク作りが行われています。吉田ゼミで

は、毎年在日する JFC の父親捜しを援助するため、関西大学においてミュージカル（文化ビザによる入国）の上演（あけぼのツアー）に協力し、同時に DAWN で製作された小物（バッグ・小物入れ・スカーフ等の織物）を SIKHAY ブランドで販売して、売り上げを寄附していました。その際、INTI RAYMI を通じてのオンライン販売、大学祭でのゼミ出展、万博でのフェアトレード祭でも販売しました。

⑧　フィリピン・スタディツアー

マニラ周辺の DAWN、スモーキーマウンテン、GLIM（少数民族バジャウ族支援）、CWR（Center for Women's Resources）、Hospicio de San Jose（サンノゼホスピス）、孤児院、国際交流基金、マニラ日本人学校を訪問して、フィリピンの様々な国際貢献団体の調査と記録を行いました。孤児院では、職員の方にインタビュー、タガログ語・英語で自己紹介、子供たちの夢を短冊に書いてもらい、お菓子の配布、しっぽ鬼ゲームを行いました。

⑨　カンボジア・スタディツアー

WYM でパートナー校であった、カンボジアのシェムリアップ小学校を訪問し、日本文化紹介と運動会による国際交流活動、ならびに、バッタンバン・カムリエン郡フィールド認定 NPO 団体テラルネッサンス事務所を訪問して、地雷、小型武器、子ども兵、平和教育という 4 つの課題に対して現地での見学を通じて、日本国内での啓発・提言活動を行うことによって課題の解決を目指しました。

⑩　水俣市スタディーツアー

熊本県水俣市での「SDGs ゴール 13. 14. 15」にあたる環境問題を中心に学びました。水俣市を訪問先に選んだ理由は、「SDGs 未来都市」として国内では特に環境問題に先進的に取り組んでいる都市であることが理由でした。水俣での環境問題に携わる方々へのインタビューを行い、何を原点に、目指す先は何かを知ることで自己啓蒙活動教養を深め、さらに得た学びをゼミ HP を通じて発信することで、活動の輪を広げることを目的としました。

⑪　高校プレゼン

ゼミ生の出身高校である関大一高、府立池田高、福井商業高、奈良育英高において、関西大学外国語学部吉田ゼミの活動について、主旨、フィリピンにおける国際貢献活動、WYM&ASEP での英語によるプレゼンテーションについて報告を行い、それらをもとにクラスで高校生を交えたディスカッションを行いました。同時に外国語学部の宣伝を行い受験の推奨活動も行いました。その結果、最も説得力のある方法は、商品自体のおいしさやパッケージの魅了をまず伝え、なおかつ社会貢献できますという方法でした。

⑫　出張授業

江田教授の「国際協力の基礎を学ぶ」において、フィリピンと共同で行っているSIKHAYのフェアトレードを例にして、ゼミ生が販売ルートと方法をワークショップ形式で紹介する授業を実施しました。

ゼミ生による総括より

開講当初より、吉田ゼミ生は情熱と責任感をもって自分たちがゼミを創り上げるという使命感に溢れており、それは10期生まで引き継がれてきました。ここではセミ生の総括における生の声を紹介します。

◎　1期生

私にとってゼロからのスタートで何かを始めること自体が非常に良い経験になったし、話し合いの中で様々なスキルをつけることが出来たと思う。たとえば、アクティブラーニングの概念の重要性と、そこから見えてくる計画力、行動力、振り返り力、改善力の強化。WYMにおけるオリエンテーションでは、チームの中でのコミュニケーションスキル、ネゴシエーションスキル、ディスカッションスキルなどを学び、具体的にはチーム間での連携の取り方や、意見を述べ方、そして意見のまとめ方などを実践的に学習することができた。フィリピンへのStudy Tourにおいては、計画（PLAN）の重要性を改めて実感しつつ、遂行するにあたり、タイムマネジメントや、「関西大学の吉田ゼミ」という一組織として行動する際の責任感や姿勢、そしてStudy Tourで学んだ内容から抽出して、さらにプロジェクトを発足するなど、実践をベースに、総合的に組織を運営する力をつけるきっかけになったと思う。すべての事は、当初からできたものではなく、何も無い状態に吉田教授のPDCAサイクル、交渉力、マネジメント方法、フィールドスタディなどのご指導があり、それをみんなで振り返りながら、軌道修正しながら活動することができた。

◎　3期生

4月から社会人となり、新生活が始まるが、吉田ゼミで培った力をこれからの人生で大いに役立てていきたいと考えている。まず、どの様な仕事をするにしても、自ら主体的に動き、周りにも刺激を与えられるような存在でいれるよう努力する。仕事の上で、自信を喪失し壁にぶつかることもあると思うが、前向きな気持ちを忘れず、吉田ゼミで伸ばした主体性を更に向上させていくつもりだ。そして、新しい環境においての多くの人々との出会いを大切にしていきたい。私がこれから働く業界は、1日に何百人、何千人もの人々が行き交う場所である。中には、自分には理解できない考えとも多く出会う事になるだろう。しかし、それを拒絶するのではなく、柔軟に受け止め、良いところは少しずつ取り入れていくことで、自分なりの色を出せていければと考えている。また、このゼミで向き合ってきた「国際協働」というテーマはずっと私の心の中に置いておくつもりである。多くの時間がかかるであろうが、将来のいつかのタ

イミングで、またこの分野と深く関われればと願っている。可能であるならば、いつかはフェアトレードで、世界の貧困問題を少しでも改善したい。平和産業である小売業をより多くの国々に根付かせたい。今はまだ漠然とした思いでしかないが、これを明確な目標として向き合っていけるように、これから努力を惜しまず進んでいくつもりだ。

◎　5期生

本ゼミで学んだチームで解決する力、意見を闘わせてより良いものをつくる方法、チームのモチベーションを見極めコントロールあるいはそれに合わせた役割を与える方法、自分の意見を話し伝える力、話をまとめる方法、企画運営力、管理力、win-winの関係を築く方法をこれからの人生で存分に活かしていきたい。（中略）今後の吉田ゼミに関しては、積極的且つ論理的に着々と物事を進める6期生の姿を見ると安心である。準備を大切にしながら、自分たちならではの活動を築き上げていってほしいと思う。吉田ゼミの今後の発展に期待している。

◎　7期生

私は卒業後、飲料メーカーに就職予定である。そこで仕事を通して達成したい目標がある。それは、日本の安心・安全な食品で世界中の人々の健康を支えることだ。実は、この目標を掲げた大きなきっかけはスタディーツアーだ。ツアー中に訪れたスラム街では、私の予想とは裏腹に、たとえ衣食住が不安定でも家族や友達と共に幸せに暮らす人々を目の当たりにし、人同士の支え合いが人の心を豊かにすることを実感した。また、物乞いをする子供たちの体の細さや、劣悪な衛生環境を肌で感じ、私たち日本人が当たり前のようにきれいな水を飲んでいることや、十分な食事を摂れていることがいかに貴重なことか痛感した。そして、日本の技術を世界でもっと役立てたいと考えるようになった。それ以来、食を通じて会話の場を提供することで、心身両面の健康から世界中の人々を支えたいと考えるようになった。もし吉田ゼミに入っていなかったら、私の将来は全く違う方向に向かっていただろう。高校生の頃から、国際協力を仕事にするにはどうすればいいのだろうと考え続けてきたその答えを、1年半のゼミ活動を通して発見することができたのは、非常に良かった。それは紛れもなく、共に支え合い、時に議論し本気でぶつかり合った7期生、そして私たちを見守ってくれた吉田先生のおかげだ。ゼミを通して培った力とみんなへの感謝を胸に、これから先も生きる勇気を持って突き進んでいきたい。

◎　9期生

私は卒業後、鉄鋼系の専門商社に就職予定である。ゼミ活動を通して「貧富の差に関係なく世界中の多くの人たちに貢献したい」そんな思いを持つようになった。国の国力を表す基準とも言われる鉄は、誰もが使用する公共交通機関にも使われており、日常生活において欠かせないものである。そこに携わることが出来ること、また国際的に活躍できる人間になるという夢を叶えられる可能性があることに感謝し、新たな環境で全身全霊を傾けて頑張りたいと思う。そのためにも、吉田ゼミで培った英語プレゼンテーション力、国際コミュニケーション力、問

題解決力や交渉力、また国際パートナーシップや国際協働のスキルを現状にとどまらず常に向上心を持って磨いていきたい。吉田ゼミでは、スキルだけではなく数えきれないほどたくさんのことを学ぶ機会を頂いた。今後は、その恩返しとして仕事を通して世界に貢献していきたいと強く思う。最後になるが、いつなんどきも情報を共有し支えて下さった吉田教授、今まで基礎を築き伝統を作り上げてきて下さった先輩方に心から感謝したい。そして何よりも、C4U（Color, Challenge, Consideration, & Cooperation）を念頭に共に活動してきた同期のおかげで、非常に有意義なゼミ活動を経験できたと思う。メンバー各々の能力の発見によって感激し尊敬する場面が多い半面、自分自身まだまだ至らないところを自覚することができた。時にはぶつかり合うこともあったが、ここまで本音で意見を言い合える仲間と出会えたことは、この上ない幸せである。本当にありがとう。今後吉田ゼミを受け継いでいく 10 期生の積極的な姿から、更なる発展と革新を期待したい。各々の道でも、C4U スピリットを心に留めて未来に向かって突き進んでいきたい。

感動の瞬間

吉田ゼミ開講当初より、ゼミ生とともに手探りでゼミ活動を展開してまいりましたが、まさに日々「僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る、道は僕のふみしだいて来た足あとだ、だから、道の最端にいつでも僕は立っている」（道程）の思いでした。そこでは「至誠にして動かざる者は未だこれ有らざるなり」（孟子）の精神のもと、「考動力と革新力」（関西大学）のある人材育成に努め、ゼミ生も自ら立てた目標を達成するため、サブゼミでのプロジェクトワークや、長期休暇中にも週一回オンラインゼミを欠かさず開催してまいりした。

このような多岐にわたる活動の中で強く感動する瞬間があります。それは、国際プロジェクトの交流において、海外パートナーとそれまで LINE やメールによる文字ベースで繋がっていたのが、ZOOM や Google Meet により、映像で繋がって相手と初対面する瞬間です。これまで、台湾の高雄市、カンボジアのシェムリアップ、アフリカのガーナと繋いできた経験はありましたが、昨年来、堺市との社会連携プロジェクトで友好都市の中国江蘇省連雲港市の大学との交流では、両都市の役所を介して多くの手続きが必要でした。最終的に相手校が画面に現れて、オンラインで対話をすることができた瞬間には他に類をみない感動をおぼえました。その際、同じ中国文化圏でありながら台湾とは違ってスケールが大きく、広大な中国大陸の各省から学生が集まって、ダイバーシティー溢れる交流を行うことができたことは大きな収穫でした。例えば、伝統的な民間芸術の切り絵細工である「剪紙」には、多くの流派があり、それには様々な寓意が込められており、独自の発達を遂げていることを知ることができ、驚きとともに中国文化の奥深さに感動をおぼえました。ZOOM のおかげで、リアルタイムで「囍」の赤文字を日中同時に切り抜くことで、国際協働作業を体感することができました。

ゼミのハイライトは、2021 年 12 月に宇津見ゼミ長が最優秀賞の他 2 賞を受賞した「関西大

×法政大 SDGs アクションプランコンテスト 2021 ～持続可能な未来のために私たちができること」で高評価を受けたことでした。全参加学生によるオーディエンス賞のみならず、サポート企業賞の講評では、「商品開発においても温故知新が行われるが、日本の伝統文化のかるたはその精神に通じる」とされ、社会的にも承認されたこと、そして最優秀賞の講評では、「ジェンダーの固定観念の改善対策として、幼少期に日本文化伝統のかるたを持ち込んでダイバーシティーに触れさせ、人々の共感を得て、国内外パートナーとともにデジタル技術と国際性で日本のかるた文化を世界に広めるアイデアは素晴らしい」ことであり、「プレゼンテーションの能力と技術が高く、今後この賞にますます重みを与えてくれるものである」と高い評価を受けることができたことでした。

この最後の部分で述べられた「プレゼンテーション力」は、これまで 10 年間継続してきた国際学生協働プレゼンテーション大会（WYM&ASEP）での経験とノウハウがあったからこそ達成できたものであり、吉田ゼミの存在価値が認められた瞬間でありました。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。（山本五十六）」

世阿弥のことばに、「その時分々々の一体々々を習ひ渉りて、また、老後の風体に似合うことを習うは、老後の初心なり」（『花鏡』）があります。ここでの初心とは、今まで体験したことのない新しい事態に対応する時の方法、あるいは、試練を乗り越えていく時の戦略や心構えということができます。

私はこれからも国際貢献活動を継続してまいりますが、試練の時に、今まで培ってきた人間力を基に、常に「初心にかえり」、自ら創意工夫してそれを乗り越えていくことで、次なる「花」を咲かせるべく邁進してまいります。ありがとうございました。